視座 13

快適な空間や美しい景観が必要なのは、観光客ではなく、毎日を過ごす住民だ。そこに地域づくり・まちづくりの原動力がある。

市村（いちむら）　次夫（つぎお）

（株式会社小布施堂代表取締役、
株式会社桝一市村酒造場代表取締役（17代））

1948（昭和23）年生まれ。慶應大学を卒業後、信越化学工業に入社。9年間の会社員生活を経て、家業である小布施堂（栗菓子屋）、桝一市村酒造場の経営を継承し現在に至る。江戸時代末期の文化人・陽明学者であり、葛飾北斎のパトロンとしても知られる高井鴻山（市村三九郎、桝一市村酒造場12代）の子孫にあたる。昭和50年代に展開される、町並み修景など、小布施のまちづくり活動に積極的に関与し、現在もユニークな発想力と行動力で、まちづくり活動を推進している。長野県都市計画審議会長財団法人長野県国際交流推進協会理事、国土交通省地域振興アドバイザーなども歴任。

※1　小布施町

長野県北部、長野盆地の北東に位置する人口約1万2000人の町。西に千曲川、南に松川、北に篠井川と、3方を川に囲まれ、東は雁田山がそびえる寒暖の差が激しい内陸性の気候で栗やりんごが特産品となっている。

※2　小布施堂界隈

かつての市場町の中心街区であり、栗菓子店である小布施堂をはじめ酒造場や高井鴻山記念館などが集積する一帯のこと。町並み修景事業はここからスタートし、現在では小布施を訪れる人が必ず立ち寄る一角となっている。

※3　高井鴻山
（たかいこうざん、1806〜1883）

江戸末期から明治期の文化人。村役人として公務、商人として経営、文化人として地域文化を振興するなど、多面的に活躍。江戸に遊学し、日本を代表する文化人と親交を持ち、自らも多くの書画を残している。北斎のパトロンとしてアトリエを建てて厚遇したことで、小布施に多くの作品が残ることとなった。

「栗」と「北斎」を持つ静かな農業のまち―小布施

長野盆地の北東に位置する**小布施**[※1]は、山と川に囲まれた平地に稲作をはじめとする農村地帯である。

江戸時代は天領とされていたが、特に重要な資源を産出したり、交通の要衝であったわけではなく、改易やお国替えなどによって、土地の調整を行ううちに大名のいない幕府の土地になってしまったもので、私は「あまり天領」と呼んでいる。代官がいたのは最初の30年くらいで、徴税効率が悪いので、代官所も閉鎖されている。残りの200年以上は、地元（村役人）に委ね、侍（役人）のいない時代だった。

小布施の西を流れる千曲川は、江戸時代から明治の中頃まで、物資を運ぶ川舟の運搬路として利用されていたが、小布施にはその船着場があり農作物などの物資の集積地、市場町としての性格も持ち、特に江戸後期に舟運が盛んになるとともに、北信濃における物産交易の拠点として栄えた。現在の**「小布施堂界隈**[※2]**」**というのは、そうした江戸期に形成された町場空間だ。

こうした賑わいの中から豪農や豪商も生まれ、彼らが葛飾北斎や小林一茶をはじめ、多数の文化人を江戸から招いたことで、この地方に文化的な資源や風土が形成された。その代表が、私の先祖でもある**高井鴻山**[※3]であり、彼に招かれた北斎が小布施に残した作品が、その後のまちづくりの資源となっていった。

鉄道の発展とともに、明治の後半には千曲川の舟運が廃れるが、それとともに小布施のまちも賑わいを失い、中心部も今でいう「シャッター商店街」のようになってしまった。当時は製糸業が花形産業であり、長野県でもあちこちに製糸会社が誕生したが、最後に勝ち残ったのが岡谷、丸子そしてお隣りの須坂。そのため一時は須坂市の衛星都市的なイメージもあったようだ。

北斎と並ぶ小布施の財産が栗。室町時代（14世紀中頃）に栽培が始まったという記録もあり、江戸時代には幕府への献上品となり、栗林は手厚く保護された。「拾われぬ　栗の見事よ　大きさよ」とは、小林一茶が小布施を訪れた時に詠んだ句だが、大粒の栗は「小布施栗」とも呼ばれ、今なお50haほどの栗林で栽培され、特産品となっている。

このように、小布施は、古くからの農業（農村集落）の町であり、江戸後期に千曲川通船による交易の拠点として、町場（中心街区）を形成したものの、明治以降はその賑わいも薄れ、再び静かな農業の町として、日々の暮らしが営まれていた。この間、明治22年の市町村制の発足に伴い小布施村となり、さら